

セネガルの子供たちに教育を！ パオバブの会  
私たちの支援活動 その2

子供はみんな、世界の宝物 (文:ディウフ 編集:水野)

私が今までの人生の中で一番幸せだったのは、セネガルの小さな村で過ごした小学生時代です。

セネガルの社会では、“子供はみんなの子供”という考えでしたから、家庭の中でも外でも、様々な愛に包まれている、と感じていました。

豊か過ぎるくらいな日本の子供たちとは比べられませんが、時間をかけて丁寧に作った料理をおなかいっぱい食べることができ、年に二、三度は新しい服を作ってもらえました。学校にも最低限必要な教材や文房具があり、学年の終わりには記念写真を撮ってもらう機会もありました。

たくさんの年中行事の思い出もあります。セネガルのイスラム社会最大の行事であるタバスキ(犠牲祭)、一週間も続く、ご馳走がたっぷりの結婚式、あちこちの村の相撲祭り、ライオン祭り、広場での女性たちの踊り・・・お正月明けには、子供たちのパーティーというもありました。グループを作って、村の家々を歌を歌いながら回ると、お米や野菜やお菓子をもらえます。それを誰かの家に持ち寄って、料理して、食べて飲んで楽しみました。本当に懐かしい。

勉強を続ける為に、小さな村から大きな町へ、そして都会へと、何度も引越しました。その頃から、旱魃等のせいで、国が貧乏になってきました。初めて、物不足、食料不足の苦しみを味わいました。

大学生の時、首都ダカールの郊外で、友人たちと一緒に、子供たちの為の無料の塾を作りました。初めてのボランティアです。教育がなければ、貧しさから抜け出せない、と思ったからです。

日本に来て、教育が、人々の成長と社会の発展にどれだけ重要な鍵となるのか、もっとよく分かりました。貧困はもちろん、健康の問題、環境の問題・・・教育は、すべての問題解決のための土台となります。そして、セネガルには、他の多くのアフリカの国々と同様、政治の問題があります。人々に教育がなければ、政治に対する権利や義務も理解できず、正しい指導者を選ぶ目も育ちません。

それなのに、セネガルの子供たちの教育状況は、私の頃より悪化していると感じました。そこで個人で支援を始めましたが、人間は一人では何もできません。一方、日本で暮らすうちに、日本の歴史や社会や日本人の心の中に、セネガルのそれらと似ているところがあることに気がきました。これならきっと、あの子供たちのことを理解してくれる、と思い、支援を呼び掛けました。予想通り、皆でやろう！と多くの反応がありました。パオバブの会の誕生です。

活動するうちに、これはセネガルの子供たちの為だけでなく、世界中の子供たちの為になる、そして、やがては世界の平和にも繋がっていく、と思いました。このことをセネガルの子供たちにも伝えて、支援の輪を、宗教や人種に関係なく、世界中に広げよう！という決意で活動しています。